

望岳山荘

いっ

思いがけないことに先週の土曜日(三月十六日)と今週の土曜日(三月二十三日)、私は二つの山岳部OB会に出席することとなった。前者は、外語山岳会で西銀座のクラブで開かれ、後者は、松中・深志山岳部OB会で松本駅前の居酒屋で開かれた。私にとって、普段は開かれたことのないこの二つの山岳部OB会が一週間間隔で相次いだこと自体、稀有の偶然というほかないけれど、その中味はきわめて対照的であ

った。

東外大山岳部は、初代部長が山の哲学者・随想家として著名な串田孫一先生、第二代がモンゴル学の権威・小沢重男名誉教授。そして三代目を現在私がお引受けしている。そのOBを主体

とした外語山岳会は、昭和三十年

代後半から四十年代にかけてが全盛期で、海外遠征でも活躍したものである。それに名著『若き日の山』の著者・串田先生を中心にした山の雑誌としてファンの多かった『アルプ』(創文社刊)の同人を多数擁し、山の写真家

版画家、詩人として活躍するメンバーも多く、知的サロンとして、もかなりのものであった。その外語山岳会が昨今は、現役山岳部員の減少に伴う若い会員の不在、山岳会活動そのものの沈滞、会合へ

の出席者の固定化などの理由で存在を問われることとなり、存続か否かを決めるための会合を開いたのである。串田先生以下、新旧の理事が集まって全員発言し、協議した結果は、OB会のようなもので、もよいから存続すべし

という結論になった。

この会合の直前に、一枚のハガキが届き、このたび松中・深志山岳部OB会を旗上げすることになったという。私にとっては卒業以来三十六年ぶりで深志高校山岳部とのかかわりを再確認させられたのであった。

当日はどんなメンバーがどの程度集まるのかと不安な気持ちで東京から駆けつけてみると、大正生まれのOBから本年度の卒業生まで、四十数名という盛況であった。会長に中島深水(松中56回)、副会長に西村忠彦(同

68回)、早乙女綾次(深志4回)、事務局長に田中弘美(同6回)の諸氏らを役員に選出し、古い歴史をもつ山岳部の伝統をふまえて、新たな交流を積み上げることとなった。現役員も約二十名と活況の様子である。集まったメンバーのなかには、何人かの山小屋

経営者や女性のOGなどもいて多彩な顔ぶれであり、若いOB諸君を中心に総勢四百名以上のOB会名簿が作製されていたのには感心した。やはり地元に立脚しているということの強さなのであろう。(中嶋 権雄・東京外大教授)

二つの山岳部OB会